

文化 Art & Culture

「挑戦」「新境地」愛した生涯

本の装丁やポスター、映画など多彩な分野で活躍したイラストレーター和田誠さん(1936〜2019年)の業績をたどる「和田誠展」が、岡山市北区天神町の県立美術館で開かれている。「和田番」の編集者として20年以上仕事を共にし、本展の企画と監修を担当した吉田宏子さん(55)＝倉敷市出身＝に、展示の見どころや和田さんとの思い出を聞いた。(船越元洋)

岡山県立美術館で「和田誠展」 企画・監修の吉田さんに聞く

吉田さんはアート系出版社「888ブックス」(東京)で「まよまよまな本」へに関わることも、フリーランスの編集者として活躍する。和田さんとの出会いは1994年、雑誌「イラストレーション」編集部時代。「第一印象は「早い人」。決断が速い、行動が早い、仕事が早い。新しいものへのアンテナも高く、常に動いて周りが追いつけないほどだった」と振り返る。

和田さんは生前から多くの個展を開いたが、ポスターや絵本など、特定の側面しか取り上げてこなかった。「『知の巨人』ならぬ『カルチャー全般の巨人』。偉大な作家は多いが、ここまでジャンルが巨大過ぎる人はいない。その全貌に迫ることが必要」と今回の企画に取り組んだ。

展示の目玉は「年表柱」。毎年のように特筆すべき仕事があるため、その全てを時系列ごとにたどり、仕事の幅広さと画風の変遷が体感できるよう工夫した。「常に仕事と新しい体験に前向きだ



「会場を巡ると、和田さんの新たな一面に出会える」と話す吉田さん

情熱と愛情満ちた仕事 幅広さ、画風変遷体感を

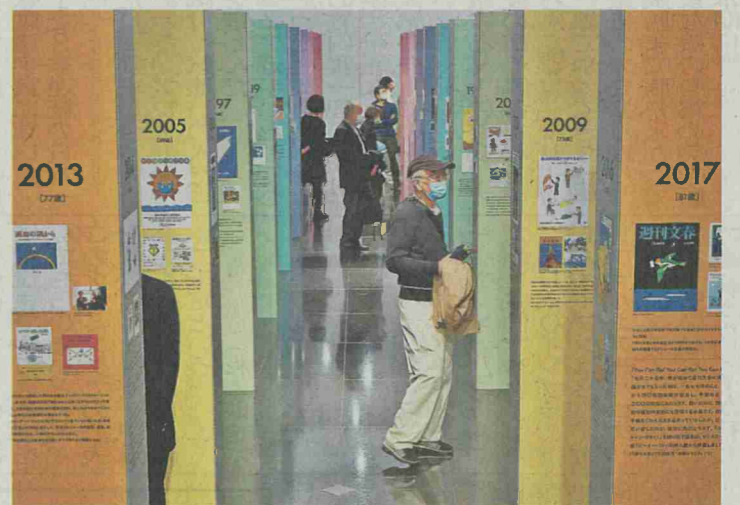
った和田さんが嫌ったのは消極的な姿勢。アイデアを出してトライする前に、無理だとか前例がないと言われると不機嫌に。挑戦と新境地を愛した生き方が伝わる展示を目指した。

2010年、普段公開されない制作現場を撮影する機会に恵まれた。「ただいま制作中」(34分)と題した映像作品になり、今回も会場で上映している。紙やキャンパスの向きをくるくる変えて描く姿に「頭の中に確たるイメージがあり、その出力に迷いが無い。手の速さと迷いのなさが取れる貴重な資料」という。

また和田さんの装丁の特徴に、読みやすく親近感のわく「和田文字」がある。映画のタイトルバックなどを参考に、漫画チックな独特の字体を生み出しており、その手書き原稿も見どころだ。

吉田さんが共に仕事をする中で、特に圧倒されたのは集中心。朝はゆっくり40分かけて事務所まで歩き、午前11時ごろに仕事を始めて夕方には終わる。残業はなし。徹夜など無理はしない。あれだけの仕事を抱えても、時間を定め、きっちり仕上げる姿に驚かされた。友人と過ごしたり、試写会を見たり、オフの時間をとても大切にしたり和田さんは、人よりずっと濃い密度で生きているようだった。

「大御所なのにどんな仕事も手を抜かず、情熱と愛情に満ちていた。だから作品には、じんわりそばに寄りそうような優しさがある。多くの人が来場し、和田作品の奥深さに触れてほしい。これまで知らなかった一面に出合っは」と話した。「和田誠展」は5月7日まで。同日を除く月曜休館。山陽新聞社など主催。



生涯の仕事の時系列で追った「年表柱」は、和田さんの膨大な業績が体感できる(中西弘之撮影)

35周年迎えた岡山県立美術館

地域へ根張る巨樹に育て

岡山県立美術館(岡山市北区天神町)が開館35周年を迎えた3月下旬、記念のコンサート「県美ファンに贈る 小さな感謝祭」を開いた。公募で寄せられた同館をイメージした曲を、岡山ゆかりの音楽家に奏でてもらう試みから、今後も多彩な芸術や人が集う場として歩みたい―という県美の思いが伝わった。

「みんなもつくる」県立美術館 県立美術館はいいな イエイ。岡山市立石井小2年國弘瑞穂さん(8)のかわいらしい歌声に2階ホールを

note

埋めた約130人の聴衆が和む。続けて同じ曲を、ピアニスト当真伊都子さん(倉敷市)とピオラ奏者島田玲さん(岡山市)がアレンジ演奏。軽やかなメロディーに、美術館へ足を運ぶときの弾む気持ちが重なった。

昨年末からの公募には、県内外から3曲の応募があり、感謝祭では國弘さんの歌を含む2曲を演奏した。もう1曲の作者は、静岡市の大学講師山本学さん(43)。ピオラとピアノの重奏による伸びやかな旋律は、木々にも見える美術館のシンボルマークに着想を得た



岡山県立美術館をテーマに公募した曲を演奏する当真さん(左から2人目)と島田さん

もので「年輪を重ねて巨木に育ってほしい」と願いを込めた」という。

1988年3月18日に開館した県立美術館は、岡山ゆかりの美術を収集・展示する一方で、ホールをはじめ、中庭や展示室も県民らの発表の場として提供してきた。「地域のさまざまな表現を受け止めてくれる場所で親しみを持てる」と当真さんは話す。

最近では、学芸員が美術への愛をぶつけ合うラップバトルが話題となった。5月には年々充実する所蔵品を、交流と継承をテーマに紹介する35周年展を企画する。あいさつで守安収館長は「過去から現在、未来へと続く歴史を縦軸に、美術、音楽など多様な芸術を横軸に、芸術の結節点として活動していきたい」と語った。そうすればきっと、地域にどっしり根を張った巨樹に育つに違いない。(平松隆)

「かわいい土木 見つけ旅」 三上美絵著

古くて小さくて、人々に愛され、大切にされている土木構造物を「ドボかわいい!」と土木ライターは言う。全国を旅して出会った橋やダム、水路の魅力を紹介

介してきた雑誌連載の記事などを一冊にまとめた。王冠のような形の配水塔、山の暮らしに溶け込む屋根付き太鼓橋、「水争い」を丸く収めた円筒

分水、らせん状に深く掘り下げた井戸など、先人の知恵と工夫が詰まった約40の「ドボク」を取り上げている。いずれも日常生活の場に近く、実際に見に行けるのが楽しい。

(技術評論社・2420円)

「かわいい土木 見つけ旅」より。遠くから王冠のように見える駒沢給水所の配水塔(東京都世田谷区)

